

古関裕而が愛した 幻の大福



駒田屋本舗

ふるさとを語る

なつかしい

福商時代

古関裕而



略歴 昭和3年3月福島商業学校卒業。同5年10月、日本コロムビア専属、現在に至る。作品数およそ4,000曲。27年日本放送協会放送文化賞、44年紫綬褒章受章。日本音楽著作権協会理事、日本作曲家協会専務理事。福島市出身、63歳。

郷里の福島市から作曲家の卵として上京してからもう四十数年にもなっていました。小学校は師範の附属小学校。当時は男子部女子部がいました。附属は阿武隈川畔にあって松崎橋のすぐそば。現在は長大(?)になってるらしいがしばらく行かないのでわからない。校舎から一段低い東側に運動場があった。川畔は木のさくでしきられてあった。当時の松崎橋は舟橋、今の人に舟橋といっても知らないだろうが舟を数隻ロープでつなぎ、その上に板が渡してある。普段は川岸から低くなっているが洪水等で増水すると舟が持ち

上がり川岸と平になる。この橋の渡り側のたもとに大福餅を売っている店があった。「矢の餅」といって平べったい大福の真ん中にシンの葉を矢羽の形に切ったのがはってある。とてもうまい餅で昼休みの時間には木のさくの間を抜けて行つては買ったものだ。弁天山の下に桃畑があったり、市内をかわいらしいSの軽便鉄道が走り、のんびりした大正中期の良き時代。名門校の附属でも生徒は和服。洋服を着た子がクラスに一名、女の子では黒知事の娘だけが洋服、師範の男子部は洋服だった。女子部は和服だった。

一学期に男子部、二学期に女子部、三学期に二部生(中学卒で師範にはいった学生)それぞれ数名が教生として各クラスに配属になった。五、六年生のころ、女子の教生の先生をすいぶんからかった。ある日、僕と三、四名が掃除当番で残ったが、教生を驚かしてやろうと、入り口の戸の上にぬれたぞうきんをはさみ、足元に水のはいたバケツを置き、机の下にかくれてはいつてくるのを待っていた。間もなくガラガラと戸が開いてバケツのひっくりかえる音とともに教生ならぬ担任の先生の大きな声が出て僕達はビックリ。もちろん目から火の出るようなおこごとをしようだいた。その遠藤喜美治先生も一昨年東京でなくなされた。当時としては最も新しい音楽教育を試み、生徒に童謡を作らせ作曲をや

らせた。私に最初の音楽指導をしてくれた先生である。教生の先生数名の方から今年も賀状をいただいた。いたずら盛りの子どもだった私達も、すでに還暦を過ぎた。

私の家は、現在の日興証券のところで古くから呉服屋をやっていたので、小学校を卒業すると商業学校にはいった。今は信夫山の北側にりっぱな校舎ができたそうだが、御山通りの女学校の向かい側、当時も古ぼけた学校だった。入学するとすぐ上級生に呼ばれた。一年生が柔道場に集められていわゆる「説教」なるものを聞かされ、以来五年生がとて恐ろしかった。やがて私達は五年生になって「説教」をする立場になると何というか優越感と最上級生の威厳を誇示することでおもしろかった。

一年生のころ、クラブ活動の一つに博物会というのがあって信夫山の植物採集に行ったのが楽しい思い出である。リーダーは商業の変わり種、瀬上の内池俊雄さん。現在大石姓で保原にお住まいだが、氏の果樹栽培、害虫駆除研究は日本一で今日の福島の果物王国は氏のおかげである。商業の変わり種はほかに剣道の横山永十君、僕もその一人らしいが、音楽課程のない商業学校で音楽の勉強ができたのは、丹治嘉市先生と坂内萬先生(先年なくなられた)等がレコードコンサートを開いてくれたり、日本古典の話を教えてくれたからである。卒業後に作曲した学生歌坂内先生作詞の「追遠歌」は四十数年後の今も高等学校の生徒に歌いつがれている。うれしいことである。